

山鉾の新調・修理による祭礼の変化 —大分県日田祇園祭を事例として—

3 回生 戸田 紗也香

I. はじめに

祇園祭は、元は京都を発祥とした祭りであり、毎年 7 月に疫病よけとして全国で開催される。大分県にも祇園祭は伝わっている。大分県内の有名な祇園祭として、中津、日田、臼杵の祇園祭が挙げられる。その中でも日田の祇園祭は 1996 年に国の重要無形民俗文化財に指定された。日田祇園祭が現在の山鉾を曳く形で始まったのは 1714 年からと伝えられている。約 300 年間、祭りは行われ続けている。

江戸時代、日田は九州天領の中心として、幕府の代官・郡代の陣屋(日田御役所)の所在地として、政治の中心であった。そして、経済、文化などの中心地でもあった。

市内には往時の町人文化を彷彿させるものが数多く残っている。

豆田地区は商人町として建設された。往時の地割が残る町並みには旧家や資料館が建ち並び、江戸時代後期の商人町の面影を色濃く残す貴重な地区である。そのため、2004 年に国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定された。

日田市では現在でも伝統的な町並みや文化が多く残っており、その文化を保護することに力を注いでいる。1594 年に日隈山(現在の亀山公園)に城が築かれ、その対岸に開かれた城下町が隈の起源である。

地理学で現在の祇園祭について調査した論文は少なく、その多くは京都の祇園祭についてである。樋口博美は祭りにおける繋がり「祭縁」を重視した(樋口, 2012)。京都では山鉾町において山鉾の巡行が行われる。近代的商業化の影響により、建物のビル化、高層化、居住住民の激減により、高齢化の進行などの要因から祇園祭の継続が危ぶまれた。しかし、今なお京都祇園祭が行われ続けているのは、町内を中心とした関わりだけでなく町外からの限定的なかかわりがあるためである。この祭りにおける社会関係を「祭縁」と呼んでいる。

佐藤弘隆は「町会所」を重視して祇園祭を論じた(佐藤, 2014)。町会所は祇園祭の運営場所となりえる存在であるが、近年近代化による都市の変容により、町会所の様相も変化してきたことを指摘している。

祇園祭をはじめとした祭りでは、町内の繋がり是非常に重要である。京都では近代化などによって祭縁や町会所などに劇的な変化がもたらされたが、他の地域ではどのような変化が見られるのか。

本稿では、地方である日田の祇園祭が現在までこれほど長く続けられ、また重要無形民俗文化財に指定されるようにまでなったのか。また、地方の曳山はどのように行われているのかを明らかにする。

II. 日田祇園祭の歴史と山鉾の復活

1) 日田祇園祭の歴史

日田の祇園祭は毎年7月20日過ぎの土曜日・日曜日に、隈・竹田地区、豆田地区の祇園社で行われる。祇園祭の始まりは869年、全国で疫病が大流行した際、京都神泉苑へ鉾を納めた御霊会が起源とされる。970年頃から八坂神社の祭礼となった。

日田では約500年前から、悪疫鎮護の願いを込めて、小規模な祇園祭が行われていたとされる。1714年には、豆田、隈両地区同時に祇園祭が始まった。この頃豆田の八坂神社が建立された。隈の八坂神社は亀翁山、現在の亀山公園に鎮座していたものを、1706年に現在地へ遷座し、素戔鳴尊を祭神とした八坂神社が小さな祠で勧請された。若宮神社の祭神は仁徳天皇、菅原神、素戔鳴尊、稲田姫命、罔象女命（ミズハメノミコト）、火産靈命（ホムスビノミコト）である。若宮社の本来の祭神は仁徳天皇である。素戔鳴尊と稲田姫命は川原町の出切に祇園社として鎮座していたものを、社殿の老朽化により慶長年間に若宮社に合祀した。

江戸時代、日田では、町人が経済的に実力を持つようになった。1714年、南条金左衛門が代官を勤めていた頃、祇園山鉾が作られ、神社に奉納された。

祇園囃子は初期からあったとされるが、現在の形になったのは、江戸時代末期であるとされる。代官塩谷大四郎に随行してきた小山徳太郎が、代官のお供で長崎に出向き、長崎の歌曲を習得し、日田に持ち帰ったのが始まりとされ、その子供、松吉によって大成された。

1800年代には、山鉾の高さは12～15m程になり、豪華絢爛なものであったと言われている。しかし、1901年、電線工事により、山鉾の高さは5m余りの高さまで引き下げられた。また、1953年豆田町などの山鉾が大水害の被害により中止になったりした。一度やめてしまうと再度始めるのは難しいため、再開されなかった。

1973年、大和町3丁目に「棒鼻会」が結成された。これは町組織とは別に山鉾運行に携わる青壮年が、任意に結成したものである。この組織は現在まで継続され、先輩から後輩へ引き継がれている。会員が毎月の例会を基盤として、祇園祭をはじめ、町内の諸行事に率先して参加・協力している。

2) 山鉾の復活

表1は日田祇園祭の最近の動きをまとめたものである。1985年には文化財保護の風潮により、日田祇園の見直しがなされ、見送りの幕などの調査が行われた。これにより、三隈町の見送り幕が新調されたり、山鉾会館が建設されたりするようになった。見送り幕とは山鉾の背面に飾る金糸・銀糸で刺繍した垂れ幕のことである。また、水引幕とは山鉾を取り囲むように飾られた横幕のことで、金糸・銀糸で刺繍される。1基の山鉾では、見送り幕と水引幕が対で付けられる。

1989年、福岡市で開催された「アジア太平洋博覧会（よかトピア）」に若宮町が8mの山

表 1. 日田祇園祭の最近の動き

1985 年	日田祇園山鉦の見送りの調査が行われる
1988 年	日田祇園山鉦会館が建設される
1989 年	福岡市で開催された「よかトピアアジア太平洋博覧会」に若宮町が 8m の山鉦を曳いて参加する
	日田祇園山鉦の駅前集団顔見世が始まる
1990 年	10m の平成山鉦が完成する
	愛媛県で開催された国民文化祭に参加する
	豆田上町の山鉦が復活する
1992 年	大阪の御堂筋パレードに参加する
1993 年	日田祇園の山鉦が大分市発足 30 周年記念オープニング・パレードに参加する
1994 年	日田祇園の山鉦が京都平安建都 1200 年祭・全国祇園山笠巡行に参加する
	日田祇園囃子がフランスで初の海外演奏を行った
1996 年	第 4 回ジャパンフェスティバルインマレーシアに日田祇園囃しが出演する
	国の重要無形民俗文化財に指定される
2004 年	ハワイ「ホノルルフェスティバル」に出場する。
2006 年	日田祇園山鉦保存対策調査委員会が設置され、日田祇園の山鉦の状況の調査が行われる
2007 年	保存対策調査委員会を保存修理委員会に移行する
	大和町の見送り幕、水引幕が修理される
2008 年	川原町の山鉦が修理される
	大和町 2 丁目山鉦見送り百数十年ぶりに新調される
2009 年	曳き手不足により平成山鉦の参加を中止決定される
	港町の見送り幕、水引幕が修理される
	豆田上町通り電線地下埋設工事が終了する
2010 年	大和町の山鉦が新調される
2013 年	若宮町の山鉦が新調される
	大和町の山鉦が修理される
	豆田上町の山鉦が新調される
2014 年	川原町の見送り幕、旗が新調される
2015 年	豆田下町の見送り幕と水引幕が復元・新調される

* 青は日田祇園の山鉦などの修理や新調に関すること

* 黄はイベントに参加、出張した出来事やアクシデントに関すること

『日田市五十年史』、『日田市六十年史』、『日田市七十年史』、

日田祇園の曳山行事パンフレットより作成

鉾を曳いて参加した。電線の設置以降、5m程の山鉾で町を廻っていたため、8mの山鉾は壮大で、参加していた若者の心に大きな影響を与えた。8mの山鉾に感動した若者は「昔のような大きな山鉾を復活させたい」と思うようになった。

その結果、1990年には新たに10m級の山鉾が復元された。平成に作られたため、この山鉾は「平成山」もしくは「平成山鉾」と呼ばれる。この「平成山」の巡行は隅・竹田地区の三隈町・大和町の担当になっている。また「平成山」の完成を契機に各町内の山鉾も次第に高さを取り戻した。

日田祇園の山鉾は、1990年愛媛県の国民文化祭、1992年大阪の御堂筋パレードに参加し、1994年には平成山が京都建都1200年祭「全国祇園山笠巡行」に参加するなど、門外不出であった日田祇園は対外的に次第に脚光を浴びるようになった。

1996年12月には、山鉾曳山行事が国の重要無形民俗文化財に指定された。2006年には、日田祇園の山鉾が古くなったため、祇園山鉾保存対策調査委員会が設置され、日田祇園の山鉾の状況の調査が行われた。翌年に祇園山鉾保存対策調査委員会を保存修理委員会に移行した。以後、各町の山鉾の修理、新調が行われた。

3) 山鉾の新調・修復

以下、川原町、大和町、若宮町、豆田上町における山鉾の新調・修復過程について述べる。2008年、保存修理委員会は川原町の山鉾を新調する事業を行った。破損状況としては横木の捻じれ、高欄下部、柱、貫、助板の割れなどが見られた。川原町の山鉾は、1821年頃の墨書きが板裏絵に見られる。現存する部材の中でも最も古いのが「見送幕」の年代で1887年である。1968年、若宮神社の山鉾材料格納倉庫の火災により、山鉾本体が焼失した。以来4年間、祇園祭の参加が中断されたが、町内の人たちの強い要望もあり、1972年限町から台車の一部を借り受け、それに焼け残りの部材を組み合わせ、再び、曳山行事に参加した。さらに1975年には、豆田地区の台車を譲り受けた。

豆田地区から譲り受けた山鉾は大型であったので、電線を接触しない5.5m以下の高さにするよう、台車の柱を短く切り詰めた。また、前後の芯棒の間隔が広いと、車が前後の根太に接触した。このため、直径の小さい車しか取り付けられず、転がりが悪いため、進行が遅かった。そこで、車と接触しないよう、根太の一部を切り欠くことで、以前よりも大径の車を取り付けられるようにした。このように不具合が生じる度に部分的に手が加えられてきた。しかし、1990年の電線の高架化に伴い、山鉾の全高は8.5mにかき上げされた。以来、山鉾に深刻な不具合が生じていた。重量の掛かり具合が悪くなったのか、引き回すと揺れが大きくなった。4本柱・高欄下部・貫にも割れが生じ、地面から跳ね出しまでの高さが均等でなくなった。右側の横木も徐々に捻れが生じ、引き回すと車が横木に当たり常に右へ逸れて進むようになり、走行が困難になった。当初は問題となる部材のみを新しい部材に交換することを検討されたが、組み立ての際、古い部材と僅かな違いが山鉾の組み立てに支障をきたし、新たな不具合を招きかねないことが懸念されたので、台車の全

てを新調することとなった。

川原町の山鉾は江戸期まで遡るほど古い歴史を持っていたが、1968年に消失し、祭りへの参加も中断することもあった。しかし、隈町や豆田地区から台車を譲り受けるなどして危機を乗り越えた。山鉾に傷みが生じ、また1990年に電線の高架化に伴って高くなった山鉾に対して、より安全性を確保する必要性が出てきたため、伝統的な山鉾の形態が失われないように配慮しながら台車を新調することとなった。

2010年には大和町の山鉾が新調された。大和町の山鉾は1955年代初期まで大和町1丁目（旧我有木町）、2丁目（旧上横町）、3丁目（旧中町）の旧3町が、それぞれ山鉾を一基ずつ保有し、隔年若しくは2年ごとに山鉾を運行していた。大和町の山鉾は1955年から1960年の間に、街灯やアーケードの設置などの道路事情により、山鉾の運行を中止せざるをえなくなった。そのため、この期間祇園祭は神事、神輿の巡行、飾り山のみとなった。1961年、旧3町の山鉾を一本化して復活し、大和町の山鉾として運行することとなった。当時、旧3町の中で最も新しかった大和町1丁目（旧我有木町）の山鉾を使用している。この山鉾の部材の墨書や刻銘を見ると、横木は1912年、跳ね出し（欄干部）は1938年、囃方床板は1947年に作られていた。しかし、道路や電線などの環境変化の度に改修を行った結果、山鉾全体のバランスが悪くなってしまった。他にも柱の浮き、柱の割れ、貫の割れ、横木の部分的欠落などの破損状況が確認されたため、修理・新調が必要と判断された。

1906年大和町の山鉾は「隈の大火災」により一部が消失した。その後、1912年に電線に接触しない高さである5.5m以下まで改修したため、4本柱を短く切り詰めた。以降も各部材の修理が繰り返し行われ、1991年には、町内の電線高架化に伴い、4本柱の途中を鉄板で継ぎ足して山鉾の全高を5mから8mにかさ上げした。1996年には日田駅前の電線の高架化に伴い山鉾の全高を8mから9m50cmにかさ上げした。このように改修・修理を繰り返した結果、全体的にバランスが悪くなってしまった。これを直すために新調を行うこととなった。

山鉾は明治時代に10mの高さで建造されていたが、1902年町内に4mの高さで電線が張られ、狭い道路に電柱が建てられたりしたため、山鉾の巡行ができなくなり、中止となった。祭礼行事に反対する人たちはこの際に中止すべきであると主張した。しかし祭りの好きな人たちは以前の台に4mの高さで組み立てて巡行を行った。しかし、台が大きくなり高さが低いため格好が悪かった。幅・長さを小さくして造り、山鉾に使用する見送幕・水引幕も台に合わせて小さく新調した。1989年、福岡の博覧会では、古い台で高さ8mの山鉾を組み立て、会場内を曳きまわした。それに刺激されて、若い人たちが中心となり、明治時代と同じように台を大きくし、高さを10mとした山鉾である平成山を建造した。しかし、大和町の台は小さいので、8mの高さでも安定が悪く、倒れる危険性があった。また、従来の山鉾は祭りごとに組み立て、解体していた。祭りの1か月前に組み立て、祭りが終わると解体して倉庫に格納していた。毎年のものであるので、接合部などが摩耗して揺れるようになり、倒壊する恐れがあった。

そのため、台車の全てを新調することとした。新調に際しては1887年の全盛期の山鉾に近づけるべく、当時の写真や日田祇園山鉾会館に展示している「五分の一模型山」(1903年製作、全盛期時代の模型山)と「飾り山」(明治時代中期の形を残す、旧上横丁の山鉾)を参考としたが、車幅や長さなどについては現在の道路状況にあわせて新調した。山鉾の新調費に1407万円かかった。

2013年には、若宮町の山鉾の新調事業が行われた。若宮町の山鉾は土台となる台車が火災で焼失したため、1977年に豆田地区より台車の一部を譲り受け、1979年に不足する部材を補って制作したものである。その後も不具合が生じるたびに、改修・修理を繰り返していたが、4本柱や車軸部分などの改修と山鉾全体のバランス改善が長年の懸案となっていた。2008年から町民有志による別途山鉾新調に向けた資金積立などの取り組みが始められた。それとともに山鉾新調の事業が決定してからは、新たに若宮町山鉾復元新調検討委員会並びに専門部会を設けた。山鉾の新調は町内の流れ曳きの際の環境を前提条件として、巡行の際に安全面を考慮した高さや横幅、それに耐え得る屋台部分を考慮して計画を進めた。若宮町は町内が広く、道路の広い所と狭い所があり、電線も高い所と低い所があるので、山鉾の4本柱を伸縮できるようにして、高い所で7.5m、低い所で5.5mに出来るようになっている。

2014年には、豆田上町の山鉾が復元新調された。1953年、上町の山鉾は、花月川氾濫の大水害により甚大な被害を受け、祇園祭への山鉾の参加が中止され、この事をきっかけに、以降、山鉾再建まで35年間中断していた。1989年、町内若手を中心とした「自町の山鉾を曳きたい」との強い声に応え、青壮年会を中心として、豆田上町山鉾振興会を設立し、再建の準備を始めた。この時期、豆田地区では、ほか3町の山鉾が既に再建され、4町4基での山鉾巡行を望む声も上がっていた。修理・補修などを繰り返しながら運行していた山鉾は、近年、台車部材の劣化等、運行上の安全が危惧されるようになり、復元新調することとなった。会員若手有志による「日田川開き観光祭・芸能隊」参加による寄付金集め等、寄付金集め等、町内外を問わず多くの方々の協力を得ることによって資金調達の問題を解決した。復元新調にあたり、2011年設立の若手を主とした建設委員会が中心となり、古写真・絵図を含む山鉾関連資料の収集と上町に伝わる口伝などの聞き取り調査と整理を行い、文化庁を始めとする行政関係者・学識経験者の指導の下、作業が行われた。1890年に製作された台車の柱梁などを使い、復元新調され、1990年、巡行が復活した。

さらに、2014年には、川原町の水引幕・旗が新調された。川原町の水引幕は1892年に製作されたものである。約120年の時を経ているため、外見からも相当の損傷が見られ出していた。また、幕はかつて川原町の上町と中町が有していた山鉾の幕で、現在の山鉾はその後の製作であって、幕と寸法が合わずに長さを縫い詰めて祭行事に用いられてきたものである。そこで、町内では今こそ新しい幕を調整するときであると、国、県、市から協力を得て、新調された。

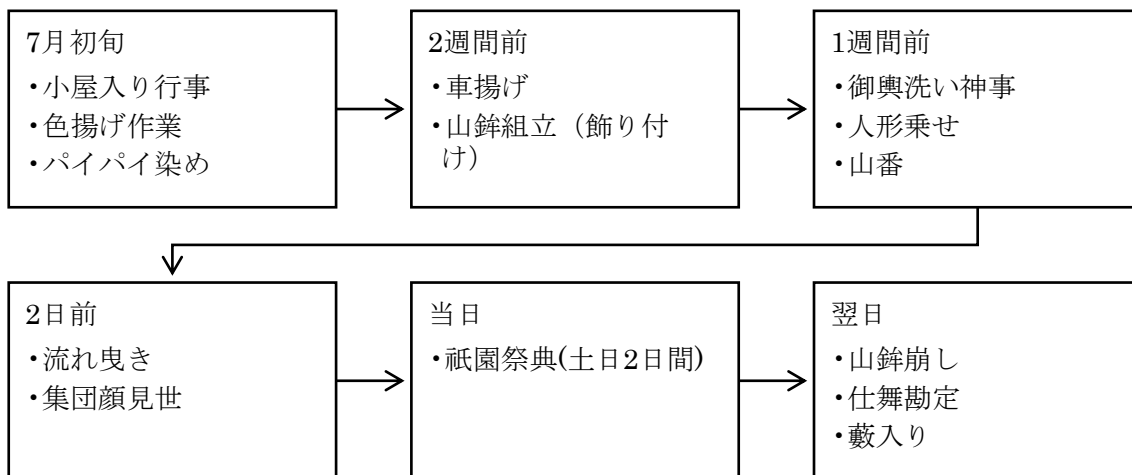


図1 日田祇園祭が行われるまでの流れ
日田市ホームページより作成

4) 日田祇園祭が行われるまでの流れ

7月初旬に大工が作業をするための仮小屋を作る，小屋入り行事が行われる。作業の開始として，祭りに参加する全員で御神酒を上げる。次に，解体された山鉾の館やはね出しなどの色を塗り直し，金紙を切った欄干の金具などを貼り替える。これを「色揚げ作業」と言う。虎や竜などの絵や模様は，町内の絵心のある美術方が中心となっていく。パイパイとは，山鉾の高欄の両側に挿し，波のしぶきのように飾られた，白く染めている竹のことで，祭りのあとは魔除けとして配布される。このパイパイを天気のいい日に染める。

2週間前に普段池の水の中に沈めて保存されている山鉾の車輪を引き上げる。車輪は赤松の丸太を輪切りにした直径2尺（約60cm）以上で作られている。この山鉾の車輪を引き上げる作業を「車揚げ」と呼ぶ。「色揚げ」された館や引き上げられた車輪を組み立てる。パイパイや手作りされた松ノ木，牡丹，あやめ，梅などの飾り付けが行われる。花は町内の婦人が作っている。

1週間前になると，深夜に三隈川で「神輿洗い神事」が行われる。白木の神輿を洗い清める。また，1週間前の日曜日前後から各町内に振り分けられた華題（山鉾に乗せられる人形の題名）の人形を，人形師の指示の元に山鉾に乗せる「人形乗せ」が行われる。そして，人形が乗せられた晩から，山の前で町内の若者が山鉾にいたずらをされないように夜警を行う「山番」が始まる。

山鉾は3日間続けて曳いてはならないという決まりがあるため，祇園祭本番の2日前に「流れ曳き」が行われる。山鉾のバランスや車の調子を見るための試運転を行う。「流れ曳き」の日に，午後2時を目処にして，JR日田駅前広場に，豆田地区4基と隈・竹田4基に，

平成山鉾を加えた計9基の山鉾が集合し、市民や観光客に披露する。

週末の朝9時頃から山鉾は動かされ、豆田地区、隈・竹田地区の地区ごとに山鉾が2日間巡行される。そして町内を巡行した後に各地域の神社に納められる。

祭りの翌日、隈・竹田の山鉾と平成山は展示用に入れ替えられ、祇園山鉾会館に展示される。以前は翌年の当番町(山元)に渡され、解体されて倉庫に納められていた。このことを「山鉾崩し」という。掛け取り帳で、購入した物の支払いや、山鉾に上がった清酒などが清算され、経費が世帯割される。近年、町内では有志による振興会組織で積み立てをし、経費の負担をしている。これを「仕舞勘定」と言う。「藪入り」とは打ち上げを兼ねた慰労である。これで祭りの行事が終わったこととなる。

5) 山鉾の巡航ルート

図2, 図3, 図4は日田祇園祭のうち、隅・竹田地区の山鉾が巡行するルートを示したものである。隈地区は平成山を日田祇園山鉾会館で管理している。大和町, 三隈町が祭りの日に平成山を担当して曳いている。自町の山に加えて1990年に平成山の担当も増えたため、運行するにあたって人員が足りない恐れもあるのではないかと考え、平成山が新しくできたことにより、自治会の負担がどのように増えたのか検討するため、ここでは隅・竹田地区の大和町, 三隈町に着目したいと思う。そのためにまず大和町, 三隈町, 平成山が祭り

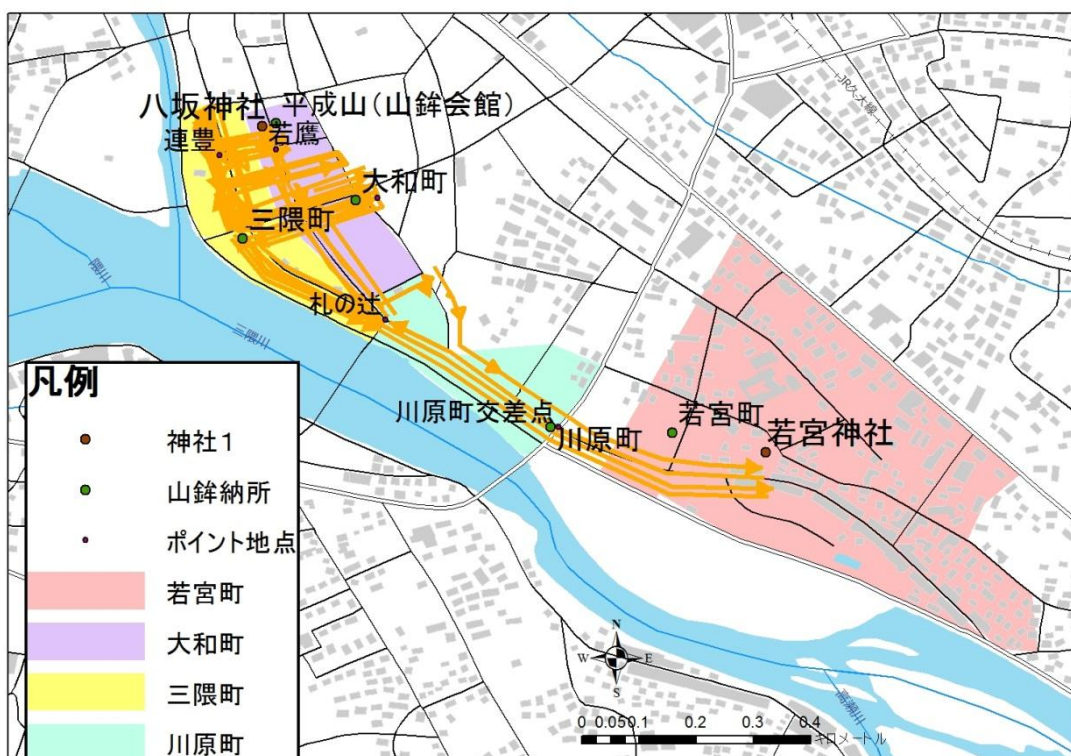


図2 三隈町の山鉾の巡行ルート
日田市観光課提供資料より作成

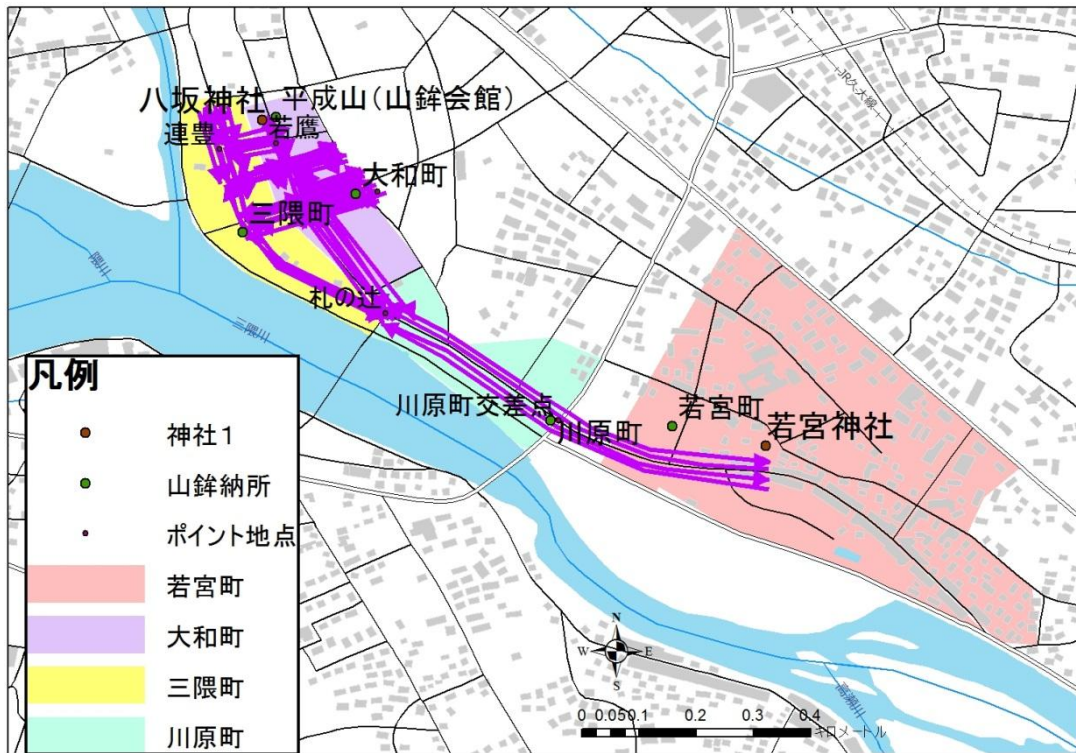


図3 大和町の山鉾の巡行ルート
日田市観光課提供資料より作成

の日にどのようなルートをとるのか見てみたい。祭りは土曜日と日曜日の2日間行われる。図2は2013年の日田祇園祭の三隈町、図3は大和町の山鉾、図4は平成山の巡行ルートを示したものである。三隈町と大和町の山鉾は土曜日の午前9時から山鉾を納めている納所を出発し、八坂神社へ向かう。10時30分に八坂神社を出発し、12時に若宮神社へ着く。13時30分両山鉾は若宮神社を出発し、各町内を巡り、八坂神社に着いたあと、19時に納所へ戻った。日曜日にも両山鉾は午前9時に納所から出発し、八坂神社に到着する。13時20分に八坂神社を出発し、14時50分に若宮神社へ到着する。15時20分に若宮神社を出発し、16時50分に八坂神社へ到着した。17時八坂神社を出発し、札の辻までまわったあと、八坂神社に戻り、納所に戻った。

平成山は土曜日の晩にのみ動かされる。19時30分に、大和町にある平成山の納所を出発した後に、若宮神社に向かい、折り返して、23時納所に戻された。

また、観光客への宣伝として、広告に山鉾が集まる日時と場所が載っている。隈・竹田地区では、隈八坂神社で土曜日の15時、日曜日の11時30分に山鉾が集合する。竹田若宮神社で土曜日の12時と15時に山鉾が集合する。札の辻では日曜日20時に隈・竹田地区の4町の山鉾が集合する。晩に山鉾が曳かれることを「晩山」と呼ぶ。平成山は土曜日の晩山のみ曳かれる。平成山は、土曜日19時30分祇園山鉾会館から、隈町公園、日田温泉旅館



図4 平成山鉾の巡行ルート
日田市観光課提供資料より作成

街、札の辻、そして若宮神社で折り返し、札の辻、黎明館、祇園山鉾会館へ向かう。黎明館前でパイパイを200本配布する。

聞き取り調査によると、山鉾巡行は大和町と三隈町では一時中止することがあっても、長年続けられており、大体同じ道を通っている。図2を見ると、大和町、三隈町は自町の地区を重点的に廻っていること。隈八坂神社から竹田若宮神社まで最短ルートをとっていること、同じ道を何度も通っていることがわかる。

広告では山鉾が集合する時刻と場所が記載されている。隈・竹田地区では土曜日の正午ごろ竹田若宮神社に、15時頃隈八坂神社に集合する。加えて、土曜日の晩山についても載っている。日曜日には11時30分、竹田若宮神社で15時ごろ、午後8時ごろ4町の山鉾が札の辻に集合する。

図を見ると、三隈町の一回のみ例外として山鉾は札の辻を通っている。札の辻は道が二又に分かれているため開けており、運行がしやすく、また一方が三隈町に、もう一方が大和町に繋がっているため、運行上どちらかを通るには札の辻を通るのが必須である。また札の辻では晩山が行われるため、集中して通るものと思われる。

三隈町も、大和町も基本的に自分の町の領域からはみ出して通るようなことはない。三隈町も、大和町も自区の領域を複数回廻っている。他の川原町や若宮町の地区は竹田若宮

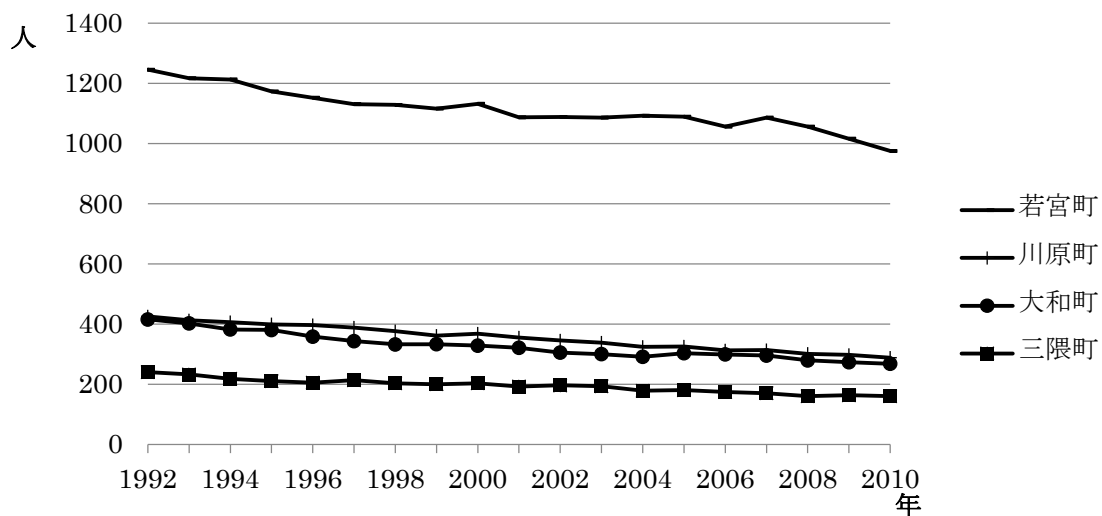


図5 隈・竹田地区における自治会別人口の推移
日田市住民登録人口調書より作成

神社に行くために通っているため、若宮神社に行ったら寄り道をせずに自区へ帰っている。

平成山の巡行回数が三隈町、大和町の山鉾より少ないのは土曜日の晩山のみ動かされるためである。また、平成山が動かされる時間帯と隈・竹田地区の4基の山鉾が動かされるタイミングはずれている。これによって町民の負担を減らし、平成山の運行を可能としていると考えられる。

III 地域住民の人口の推移と祭礼費用の負担

地域住民が神社の氏子であり、祭りの主催者でもある。地域住民は祭礼では各地域が所有する山鉾の曳き手を行う。図5は日田市の隈・竹田地区における自治会別人口の年別推移を示したものである。この人数はほぼ氏子の人数と一致すると考えられる。若宮町は土地が広いので人口も大きくなっている。図5は見るに隈・竹田地区の人口は徐々に減少している。町内民が山の運行を行っているため、人口が減少しているということは祭りの参加者も徐々に減少していると言える。

図6は大和町の世帯数の年別推移を示したものである。日田祇園祭を行うための費用は町の世帯ごとに徴収される。各町の世帯数も減少しているということはそれだけ町民に対する祭礼の負担額が増えるということとなる。

聞き取り調査によると、山鉾の運行に必要な人数は最低でも20~30人以上必要である。山鉾の運行は男性が行うこととなっている。

町内で山鉾を運行するための人数が足りない場合は、日田市内の他町から祭り好きの人が応援に来る。また就職のために福岡県など県外に行った人も多数存在する。祭りに参加する人の6割が地元の祭りに参加するために県外から帰ってきている。今のところ運行に

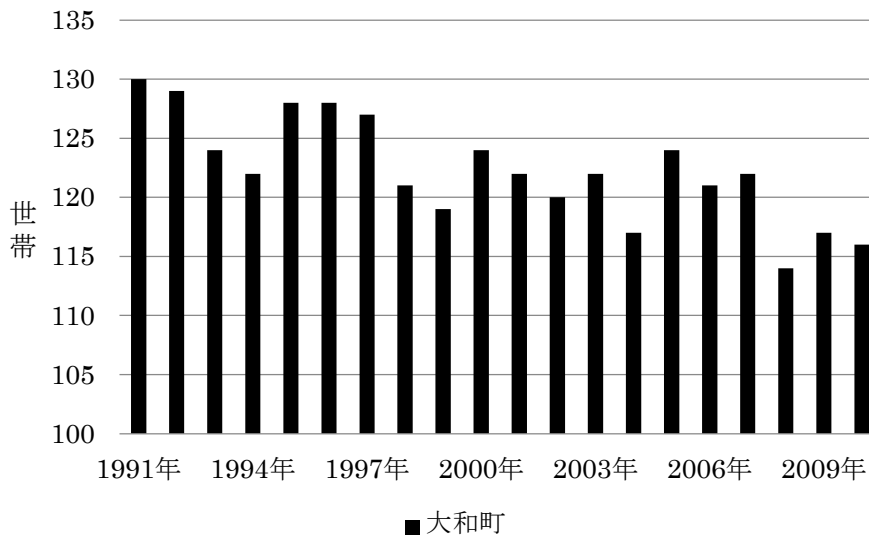


図6 大和町における世帯数の年別推移
日田市住民登録人口調書より作成

問題はないと聞いた。すなわち、日田祇園祭を実施している各町では人口が減少しているものの、他からの応援や地元出身者の参加により、祭礼は維持されていることが分かる。

図7は2015年における大和町の日田祇園祭にかかる事業の収支を示したものである。2015年の大和町の人口は219人、104世帯である。日田祇園祭にかかる費用はこの104世帯から徴収される。図の上は事業会計の収入、下は事業会計の支出を示したものである。町内負担金は約26万5000円、助成金は8万円となっている。助成金は山鉾が文化財に指定されていることに伴う補助金と考えられる。町内からの収入は世帯ごとに徴収される。大和町における1世帯当たりの金額は2548円である。町内負担金は、収入全体の約21.2%に過ぎない。収入は他に広告収入や展示補修委託料、協賛金が挙げられる。収入のうち、最も多いのが広告収入40万円で、約32%を占めている。また、第2位の町内負担金に次いで多いのが、顔見せ祝儀・協賛金20万円で、約16%を占めている。これらの広告収入や顔見せ祝儀・協賛金で、収入の約48%を占めており、山鉾の巡行による集客と関係していると考えられる。

支出に関しては、「山鉾小屋建設費」、「山鉾色揚・製作費」といった山鉾の組み立て作業に多く費用がかかっていることがわかる。80万1726円、全体の約6割が山鉾の組み立てに費やされる。すなわち、日田祇園祭りの象徴である山鉾巡行に一番経費がかかっていると指摘できる。

以上のことから山鉾の運行には非常に金がかかる。上にも述べたように人口が減ると町内の負担が増えるという問題がある。しかし、今のところ大和町では、1世帯2548円であるため、1世帯の負担はそこまで重くないと考えられる。

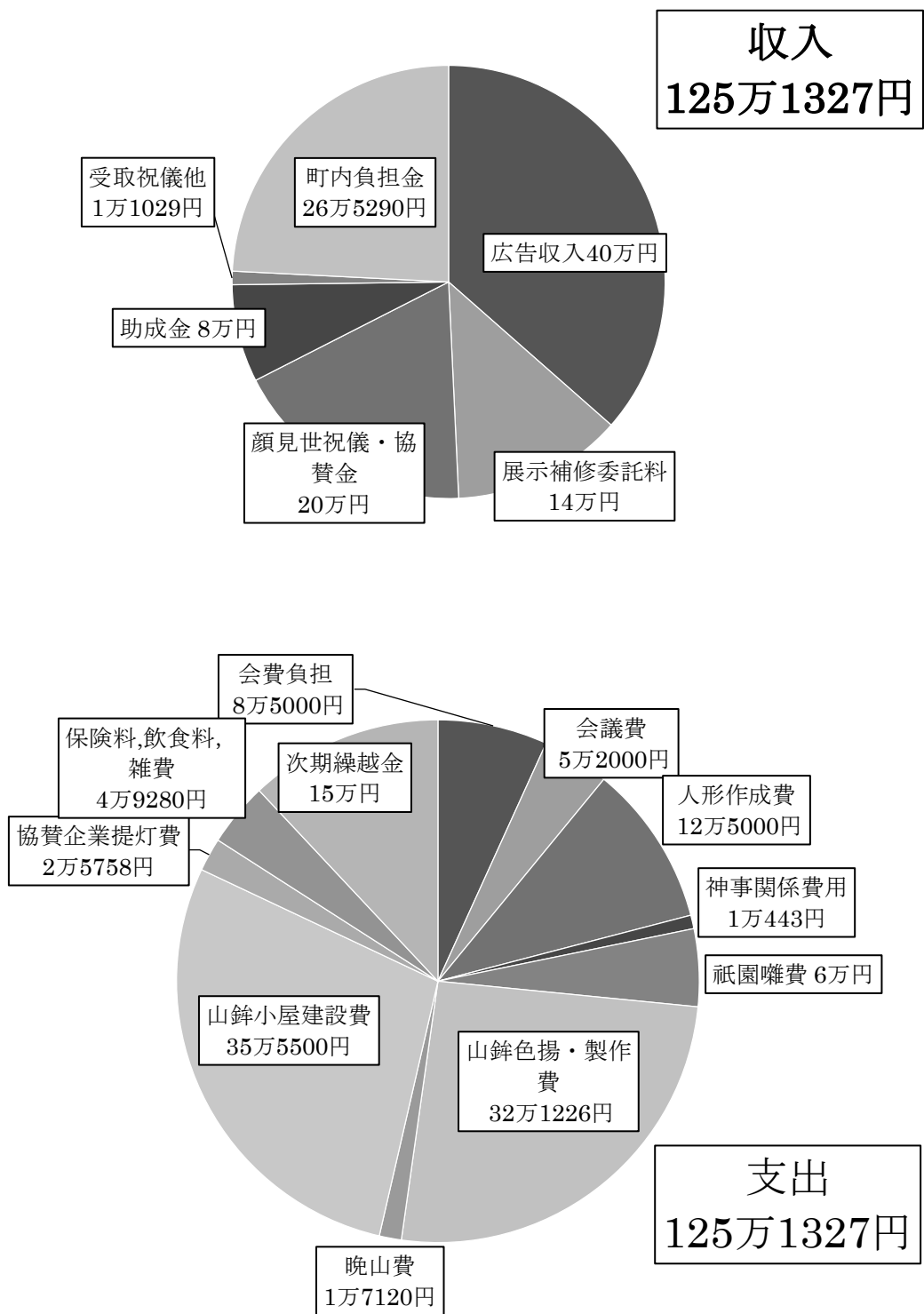


図7 大和町における日田祇園祭の収支（2015年）

日田祇園山鉾会館提供資料より作成

表2 大和町2丁目・大和町における山鉾の幕，山鉾新調の事業収入の負担割合

事業収入	大和町2丁目 見送幕・水引幕新調(2007)		大和町 山鉾新調(2010)	
	金額(円)	割合(%)	金額(円)	割合(%)
国庫補助金	13722000	50	7490000	50
大分県補助金	2195000	8	1198000	8
日田市補助金	5764000	21	3146000	21
振興会負担金	5764000	21	3146000	21
合計	27445000	100	14980000	100

出典：日田市文化財保護課の提供資料より作成

表2は2007年に大和町2丁目の見送幕と水引幕，2010年に大和町の山鉾を新調した際の事業収入の負担割合を示したものである。山鉾の復元，新調のための収入は国から50%，大分県から8%，日田市から21%補助金が支払われた。残り21%が振興会（自治会）の負担となる。他の町内の見送り幕や水引幕の新調にもこの割合で補助金が支払われる。現在，過去の町割と異なっているが，大和町2丁目に当たる場所に三隈町の山鉾が管理されているため，大和町2丁目は三隈町のことを指す。三隈町の世帯数は2007年当時71世帯，大和町の2010年での世帯数は116世帯であった。振興会負担金が各町の自治会から集められるとすると，およその目安で，三隈町の見送り幕・水引幕新調は1世帯約8万1183円，大和町の山鉾新調は1世帯で約2万7120円となる。

振興会負担金とは日田祇園山鉾振興会から出された金である。事業費は補助金の割合が大きいため，振興会にかかる負担がいくばくか減っている。すなわち，山鉾の新調には莫大な経費がかかるものの，振興会も含めた地元の負担割合は21%に過ぎず，文化財指定に伴う，山鉾の新調には行政からの補助金の存在がいかに大きいか分かる。

V 集団顔見世による誘客数の増加

表1にあるように，1989年から観光客向けに，日田駅前に山鉾が集められる「集団顔見世」が始まった。

図8は日田祇園での山鉾集団顔見世と本番の祇園祭の誘客数の推移を示したものである。年によっては雨天によって，誘客数が少なくなったり，顔見世や祭自体が中止になったりすることがあった。例えば，2003年と2006年は悪天候のため集団顔見世が中止となった。2012年は7月11日から14日に発生した九州北部豪雨の直後であったため，顔見世の誘客数が減少し，土日は雨だったため祇園祭の誘客数も減少した。

誘客数の推移を見ると，ここ10年で増加傾向にある。2007年と2015年を比較すると，集団顔見世の誘客数が5000人から20000人へと大きく増加している。集団顔見世は1989年に観光客向けに始まった。以前は，祇園祭の2日前は，山鉾のバランスや車の調子を見

るための試運転を行う「流れ曳き」(図 1)のみであったが、その延長として集団顔見世が行われるようになった。豆田地区の 4 基、隈・竹田地区の 4 基の町山と平成山の計 9 基が JR 日田駅前に集合する。日田市内にある全ての山鉾が集まるのはこの日のみである。観光

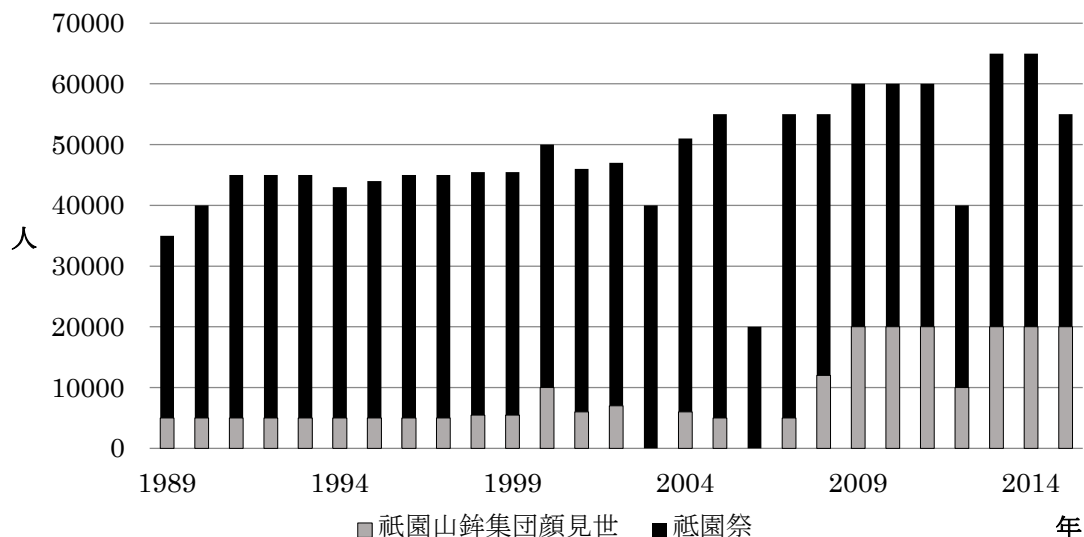


図 8 日田祇園での山鉾集団顔見世と祇園祭の年別誘客数の推移
日田市観光課提供資料より作成

客に全ての山鉾を同時に 1 ヶ所で見ることができると、観光客は多く集まる。2008 年ほどから顔見世の観光客が増え始めたが、その要因は山鉾、見送り幕や水引幕などの新調や修理によって注目を浴びたためと考えられる。2007 年から大和町の山鉾の水引幕、見送り幕の修理が行われた。以後、各町の山鉾、見送り幕、水引幕の修理新調が行われた。修理新調されたことが新聞・テレビ等で報道され、それが観光客を呼び込んだのではないかと考えられる。そしてこの集団顔見世の誘客数が増加することによって日田祇園全体の誘客数が押し上げられている。

V おわりに

日田祇園祭の劇的な契機となったのは、福岡市で開催された「よかトピア」に参加し、その翌年に平成山が出来たことである。これを契機に県外へ出張することが増え注目を浴びることが多くなった。また他の山鉾の高さも引き上げられた。これによって日田祇園山鉾が国の重要無形民俗文化財まで押し上げられたと考えられる。

1989 年、観光客向けに「流れ曳き」の延長で「集団顔見世」が始まった。この集団顔見世により日田祇園祭を見学する観光客の人数を押し上げている。そして、近年は山鉾、幕などの修復・新調により更に脚光を浴びたため、観光客が増加し、日田祇園祭はますます注目を浴びている。

2014年3月、文化庁は「日田祇園の曳山行事」を含めた全国「山・鉦・屋台」32件を、ユネスコ無形文化遺産候補として一括申請することを決定し、現在登録に向けた準備が行われている。

日田市は古い街並みの残った、祇園祭にふさわしい美しい景観がある。日田祇園祭の存在が国内外に広まり、観光客の増加により、祇園祭といった文化遺産を通じた地域活性化が進むことを期待したい。

—付記—

本稿の作成にあたり、日田祇園山鉦振興会会長の後藤稔夫氏、人形師の長嶋静雄氏、棒鼻会の田辺賢二氏、日田市教育庁文化財保護課文化財管理係主任の坂本裕也氏、日田市商工観光部観光課観光企画係主事補の菅原誠悟氏、日田市商工観光部観光課長の栞野邦彦氏、市民環境部市民課窓口サービス係の松本温子氏にはお忙しい中にも関わらず、大変お世話になりました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

参考文献

樋口博美 2012 祇園祭の山鉦祭礼をめぐる祭縁としての社会関係—祭を支える人々—
専修人間科学論集社会学編 2 113-125

佐藤弘隆 2014 祇園祭山鉦町における町会所の形態の変化—高度経済成長期以降を中心
に— 京都民俗学会会誌 32 59-76

三十周年記念誌編集委員会 2009 『日田祇園 若宮町祇園山鉦復元三十周年記念誌』 若
宮町祇園山鉦振興会

日田市五十年史編集委員会 1993年 『日田市五十年史』 日田市

日田市六十年史編集委員会 2002年 『日田市六十年史』 日田市

日田市七十年史編集委員会 2013年 『日田市七十年史』 日田市